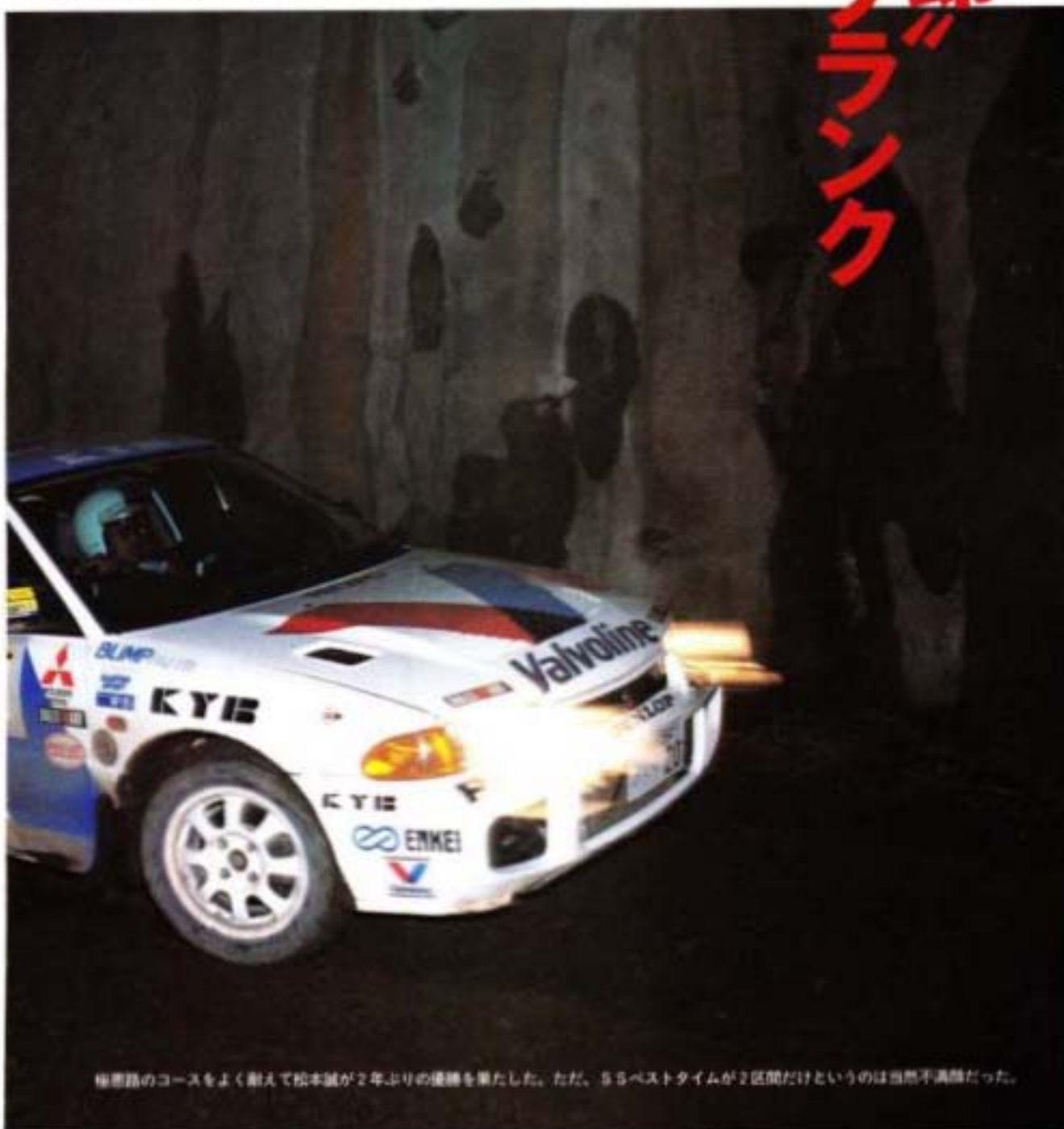


'96.7月号



今回もオートボリスがスタート会場だが使えたのは駐車場だけ。豪華施設がやけに寂しい。

# マコト節 2年のブランク



極悪路のコースをよく耐えて松本誠が2年ぶりの優勝を果たした。ただ、5.5ベストタイムが2区間だけというのは当然不満だった。

# '96全日本ラリー選手権〈第3戦〉 '96 ACK SPRING RALLY

■4月20～21日/熊本・上津江村周辺230km 撮影・上田 健/報告・村井 豊

## Cクラス完走6台のサバイバル戦!

A C Kスプリングラリーというところからコースで知られるが、ここは例年以上にハードなコース設定がなされていた。Cクラスは出走15台中完走がわずかに6台、完走率33%という数字だけを見ても、いかに過酷なサバイバルラリーだったか、よくわかろうというもの。Cクラスで完走者全員が表彰対象となつたのは、恐らく全日本ラリーでは初めてのことだろう。

この生き残りゲームを制したのは松本誠だ。昨年未勝利の松本にとっては、34年振り戦ひえつきラリー以来、2年ぶりの優勝となる。さぞかし勝利の美酒がうまかっただろう、と話を聞くと、



納得がいらない勝利とはいえない表彰式ではやはりこの人が主役。約2年ぶりのマコト節が響く!!

「アカン!! 勝つには勝つたけど、まだまだや、ちょっと体調も悪かったしな、もっとクルマもドライブも仕上げなきゃ」と不満をぶつけるのだ。表彰式でこそ2年ぶりのマコト節を聞かせたが、表情はいべん中同様にスカッと快晴とはいかなかった。扉を開き振り返るとそれもそのはずで、ラリー運びのうまさで勝利をつかむという、ベテランらしい、したたかな勝ち方だった。

松本はハイアベを含んだ序盤のラリー区間でリードを広げ、トップでミステを折り返した。だが55分の中盤、ウエット路にアドバンM T-31を武器にした坂田原文城が、連続ベストタイムをたたき出して差を始めてき

た。そして、ミステ最終55分のベストタイムでついに逆転。さらに最終ステージに入ると9秒差まで松本を突き放してしまったのだ。残された55分は3本、両者の勢いからいっても、松本の再逆転は難しい状況と思われた。しかし、乗れるバスコンハイアベで、どうしたことが坂田原が路上の石にフロントをおられる形でコースアウト、コースに復帰できずにリタイヤとなってしまった。これでトップに再浮上した松本は、初の2位入賞と大健闘した勝田、ジュニア、範彦に4秒もの大差をつけてフィニッシュ。速さでは坂田原に負けていただけに、松本の豪うつも理解できる!!

(結果と詳細は132ページ)





Bは田口幸広が積出量を抑えCJ4Aミラージュのデビューを勝利で飾る。関係者もひと安心。

## '96 ACK SPRING RALLY

今回の優勝によりやっとチャンプ争いの戦線復帰を果たした田口/藤田浩一。



B3位は復活の兆しがみえた激走で増村淳、ガンがいいACK(昨季初勝利)で弾みがついた。



B4位には地元の後井俊介/井土平達也、旧型で闘って入賞。3秒でメダルだった。残念。



旧型車の藤田豊は「積量(ハイアベ)をあれだけ速く走られちゃ」と田口に脱帽のB2位。



ゴール後の食事は上津江村フィッシングセンターのバイキングが用意された。



CJ4Aミラージュ発進。動力性能は○操縦性は！が補戦の評価だ。



表彰式では父の藤田剛夫氏も壇上に呼ばれ息子の成長ぶりに目を細めていた。

小田切曜之ナビの子分、水野泰治は最下位ながら完走し、ゴールしてみたら、なんと6位入賞という大金星。



スタート前に談笑する成田原文雄、新井敏彦、いまいが“旬”の2人。

昨年優勝の植郎美津雄は終盤ラリー区間のチョンボで沈没しC5位。惜しくも2位入賞を逃した。

終わってみれば片岡良史はC3位浮上り、岸聖のミスがなければ、



北海道にはこんな悪路はない！ 田中伸幸はしのでゴールまでマシンを選びC4位入賞。



# '96 ACK SPRING RALLY



「東津原さんがいるときに勝負がしたい」と彼は挑戦状をたたきつけた。



神谷広はACK 3連勝 (A、Bクラス)。SS中心の中盤でトップにたつと、危ない走りでも逃げきり28秒の大差をつけて完勝した。



またしても2位をゲット。平塚志博は240点に伸ばしてリーダーをばく漢中。



A 3位には守屋敬昭が入り、今季初ポイントゲットとなる入賞を果たした。



若槻幸治部は後半にベストタイムをマークしA 4位を得た。

## TOPICS

### ADVANとDUNLOPニュータイヤ投入!



アドバンのニューミラージュ用新タイヤA033R (迄)とダンロップSP82Rの強靭タイヤSP84Rがラリーで実戦デビュー。



チームバックリとスターク監督、俳優・神田正輝氏がラリー会場に初お目見え。いるだけで華やいだムードになるのはさすがだ。



## 全フリー選手権第3回 ACKスプリングラ



A、左から3位守屋敬昭/小花敏也、優勝神谷広/秋竹誠之、2位平塚志博/黒田正彦 (代)。

## 全フリー選手権第3回 ACKスプリングラ



B、左から2位鎌田豊/實田満彦、優勝山口幸宏/藤田浩一、3位増村淳/吉田和広。

## 全フリー選手権第3回 ACKスプリングラ



C、左から2位井戸田政喜/勝田勲彦、優勝松本誠/岡本徹、3位片岡良宏 (代)/田口雅生 (代)。

表彰式を前にして朝食のおにぎりを片手にカヤバのエンジニアと話をする松本誠



序盤を終えてシリーズストップは桜井幸彦  
だがダートイン緒戦を飾った松本誠に  
“初チャンプ奪取”の勝算あり!?

# 松本誠に ことしこそ、に かける意地

■序盤から混戦模様だった今回のA.C.K.。だが桜井が抜け、奴田原が抜け、新井が抜け……。悪路にいたぶられ、つぶれていったライバルたちをしり目に、「たんとんと走っただけ」と言う松本誠が、悲願のチャンプに向けて大きな一歩を踏み出した。(報告・村井豊)

## 悪路を克服するのモラリ

昨年のA.C.K.スプリングラリーは豪雨のなか開催され、完走者64名だった。ことしはなんと37名！特にCクラスは出走18台中3分の1の6台しかライニッシュラインを通過することができず、久々に、生き残りがかかるA.C.Kらしいラリー設定となった。

「この周辺の林道はどこも似た感じですが、良質な路面ばかりでなく、悪路を克服するのムラりです。こうしただ設定としました。予想したよりリタイア数が多かったんですけどね」

と主催者が説明するコースには、人間の頭ほどある岩が多数露出しており、路面は出でぬかかっている。敷石が全開走行すれば深いワダチが掘れ、その中から岩や鋭利な石がゴロゴロと出てくる。コーナーに飛び込みワダチを利用したコーナーリングをしようにもワダチの壁がもろ

く崩れ、バランスを失ったマシンに岩がダメージを与え、鋭利な石の角がタイヤをカットする。今回のコースは、全編にわたってこんな路面の連続だった。

久々のサバイバルイベントにチャレンジしたクルーはCクラス18台、Bクラス18台、Aクラス18台の合計54台。Cクラスは松本誠、岡崎忠一が戦線復帰し、フルメンバーがそろった。Bクラスは、話題のCJ4Aミラージュが、いよいよラリーのダートライダーにデビューした。ほとんどのレギュラーが乗り換えてきたが、王者復帰を狙う藤田豊と小林康弘のシリーズリーダーを分ける師弟コンビは、旧態を持ち込んできた。

「時間がなかったんだ、中途半端に新車をつかってきても、戦闘方は未知数だからね」

という藤田の言葉に、  
「全日本戦なんだから、みんな



順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
1	151	99	204	185	1829	18	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
2	153	99	208	187	1827	19	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
3	158	101	211	191	1826	20	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
4	164	104	216	196	1826	21	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
5	167	103	214	194	1826	22	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
6	168	104	214	194	1826	23	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
7	168	104	214	194	1826	24	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
8	168	104	214	194	1826	25	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
9	168	104	214	194	1826	26	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
10	168	104	214	194	1826	27	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
11	168	104	214	194	1826	28	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
12	168	104	214	194	1826	29	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
13	168	104	214	194	1826	30	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
14	168	104	214	194	1826	31	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
15	168	104	214	194	1826	32	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
16	168	104	214	194	1826	33	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
17	168	104	214	194	1826	34	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
18	168	104	214	194	1826	35	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
19	168	104	214	194	1826	36	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
20	168	104	214	194	1826	37	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
21	168	104	214	194	1826	38	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
22	168	104	214	194	1826	39	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
23	168	104	214	194	1826	40	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
24	168	104	214	194	1826	41	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
25	168	104	214	194	1826	42	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
26	168	104	214	194	1826	43	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
27	168	104	214	194	1826	44	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
28	168	104	214	194	1826	45	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
29	168	104	214	194	1826	46	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44
30	168	104	214	194	1826	47	27	30	43	48	41	42	42	44	44	44	44	44	44	44

だ、一友、サバイバル展開を予感させるようにセリカの高橋一志がハイアペでコースアウトし、サービスマンに戻ってきた大嶋も、「走りはかなり良くなったのに、情けねえ」とミックスオンを壊してリタイア届を提出した。

軽サービスマンを受けた競走車は、1スナより北に延ばした2スナのコースに、午後8時からアタックした。最初のSSは、今回初めて許可を取った林道で、浮き砂利、石と岩の難コース。

「1スナはGR-17でいったんだけ、路面に合ってなかったの、思いきってスタート5分前にMT-1に換えた。2スナは交換する時間も取れるし前2輪を途中で新品に交換する」

という叔田原文屋の賭けが的中。4分38秒でベストをマークした。だが松本も、コースオフしてエンジンを止めながら叔田原の1秒遅れだ。3番手、同じMT-31作戦で出た片岡が44秒、2クルーの速さがわかるだろう。4番手には1秒差で競走、松井山口修らが続く。新井はこのSSでスピン、スタックして7分38秒も要したかやの外だ。

トップ争いのはらは、SS2で叔田原がまたしてもベストタイムをマーク。松本は4秒差の3番手でトータルの差は5秒。さらに叔田原は、2スナ最終のSS3も最速で駆け抜け、SS3でもコースオフした松本を、ついに1秒逆転してトップでサ

ービスマンに編入してきた。MT-31が当たりましたね。こういう路面になるとおは本当いい。でも、1秒差でしよう。残りまだ14km以上ありますからね。ただ、SSでは勝っているんですよ。慎重に走りたい。前戦優勝争いに敗れているから。マシンもエポ田（走行90分）になってから走りやすい、心配は目の耐久性です。舗装区間で負けてもダートで取り返せますけど、そこまでタイヤが持つが、それに、交換する時間が取れるかが問題」と逃げきりに余裕をみせた。

一方逆転された松本は、「あかん、きょうはつまらない。こんな路面じゃ、思いきり走れないし、2回もエンジンを止めてる。クルマを壊さないように抑えた走りやから、ストレスがたまると。逆転、まあ、やるだけやるわ」

体調不良のせいもあるのだから、ぶ然とした表情でサービスマンに陣取っていた。2スナを終

了して、ラリーは完全に叔田原松本の2クルーによるトップ争いに絞られ、以降3番手争いは松本から1秒差に、「全然ダメだよ、石を避けながら走ってもらえん」という競走がつけ、彼に4秒差で山口、さらに10秒開いて「セリカでは、まあアフロを打って、それからタイヤが接地す

る感じ（笑）」という石田雅と1秒差で勝田龍彦、11秒開いて田中伸平と2秒差で片岡というように大きく差がついた。松井はSS1でコースオフ、復讐してきたもののサーペンションにダメージを受け、トップと4秒差と低迷した。2スナを終え、生き残りは11クルーとなった。

だが、続くラリー区間、SS2ゴールから1・5kmを30km/h、バスコロンで54km/hに上がるが「問題なところ、区間だった、直線を走る松本は1倍遅られんなんてこんなところだ」と叔田原のアドバンカラーがコース外にすり落ちていたのだ。

「石にはじかれたんだろうと思っただけ、着地したところが土手外で、そのままスルッ、ズルッで落ちちゃいました。別に焦っていただけじゃやないし、予定どおりでしたからね。ぼくはこういうことが多すぎますよね。次からは、本当にこういうことがないように気をつける」

叔田原のリタイアで、一気に松本は楽になった。さらに、25秒差で2位の競走も松本をリタックさせてしまった。このク

## なぜか冴えない「マ」ト節

いよいよ勝負の3スナ。SS2を逆走する6kmから始まり、32km/hハイアペ順走の2・2km、30km/hハイアペ順走の2・2km、同1・4kmの連続SS1逆走の3・1切でフィニッシュとなる。2度目の走行でさらに路面は荒れている。目付が変わろうかという午前9時少し前、最後の長い直線のスタートがきられた。

今回の叔田原はエポ田&MT-1の能力を極限まで引き出していた。2スナ3連続ベストを受けて、さらにSS4もベストタイムをマーク！ それも決定打ともいえるべき松本に7秒もの大差をつける快走だった。これで両者の差は7秒。松本のあきらめの色が濃くなってきたのだ。

だが、続くラリー区間、SS2ゴールから1・5kmを30km/h、バスコロンで54km/hに上がるが「問題なところ、区間だった、直線を走る松本は1倍遅られんなんてこんなところだ」と叔田原のアドバンカラーがコース外にすり落ちていたのだ。

「石にはじかれたんだろうと思っただけ、着地したところが土手外で、そのままスルッ、ズルッで落ちちゃいました。別に焦っていただけじゃやないし、予定どおりでしたからね。ぼくはこういうことが多すぎますよね。次からは、本当にこういうことがないように気をつける」

叔田原のリタイアで、一気に松本は楽になった。さらに、25秒差で2位の競走も松本をリタックさせてしまった。このク





## B鎌田の計画は失敗の連続

群馬の途中のまんやろから、北海道やな、それまでにはなんとかせんとさ」

「まあ、後者の意味だ、結局、鎌田がブッチャって勝手にいなくなつた原因には、松本のブライドが許さなかつたというこ

「Bクラスは、早々とCクラスを投入する。多数派の意思が正しいが、完成度を高めた鎌田小林が正しいのか注目された。だが原因は、得意、不得意の差が勝負を決することになる。

「Bクラスのハイアベは、最初のハイアベを優勝候補筆頭の原口真が3秒の最少遅れで飛び出し、田日本吉3秒、鎌田3秒、菅野が3秒、増村が3秒、松井が3秒と右方と左方が僅差で続いた。しかし、結果を合算して区間員、出口がキレた。

「早着しようになつたら、みんなに悪いんで遅くたうらいですよ(笑)」

と口角をたまたまながら、唯ひとり一ヶタの3秒遅れにとどめ、Cクラスで出口も3秒差のトップに躍り出た。たまたま出口はトップとの差、以下同様に前半後半の増村、菅野、は秒差に鎌田

とか、だが、松本は優勝によつて11ポイントとして、松井と増村の2番手に浮上して来た。混戦が予測される今シーズン、納得できなかつたが、松本にとって懐儀ある一勝であることには変わりはない。

松井、鎌田は全車第一部門を独占する本車第一部門代官若衆を相手に、またまた下野を許さない。

「Cクラスに入るよ、九州は相性が悪い」という鎌田が快進した。SSSを4分5秒のベストでクリア。出口との差を3秒縮めたのだ。続くSSSで鎌田は遅れたりのコースを全周で改める。ところが、オーバースピードがたたり、アンダースタアの体勢でマシンはアウト側の樹木に「」。「やっぱ九州はダメか」とありあけかけた瞬間、マシンはコースに復帰したという。それでもベストの出口増村に1秒差、だがこのコースオフで得意になつて鎌田の性能もストップ。Cクラスを待たして出口のリードは変わらぬ。鎌田は3秒差とわずかに詰め寄つただけとなった。

上位以降は増村差の増村を第

眼に松井、菅野が1秒ずつ遅れて続く展開だ。ライバルたちは出口や小林がペーストあり、コースアウトありで大幅に遅れている。

「出口のリードは、鎌田も追いつきたいけれど、追いつてくるよ(笑)」

「鎌田のハイアベがうまくいかなかった。結局かまれないが、うと思つて、改めていきましたから、Cクラスもこのペースで逃げさりますよ」

と鎌田のサービスマンとしてコメント。それには鎌田も

「お前もな、結果のハイアベをみんな逃がして、キヤイけない危ないから(笑)。どうも、おれってハイアベがダメだね、日いっばいばいばいなんだ、補正がどうのとか、スリッパがどうのって考えちゃう。その差だけ、Cクラスで勝つてるんだよ、Cクラスは1秒も遅れてるから、結果はお前によつても、シートで1分遅れ(笑)さあ(笑)」

と皮肉する。

「Cクラスの成績は、鎌田のサービスマンが計画が、またしてもコースオフで失敗してしまつた。

「もうたまたま、日頃でコースアウトだも、10秒以上遅れていたら足なのに、ブレイキが抜けるとそのままSSSと樹木にはま

つてしまった」

SSSと決定のSSSだ。またしても大層リードをライにして1秒遅れ、反撃ムードを断たねながら、懸念にさらされて1秒遅れたが、早くもSSS、しかも先導者鎌田は出口に1秒、1秒差をつけられ、3秒差のままワイユッシュラインを通過した。「ハイアベがすべてでしよう。Cクラスは、追い上げられてもそれはど大きな差がつかないで、トントンのタイムだったから、鎌田さんのタイムを見ながら、ペース配分できました。やっと思つて、なんとかがスタートラインにたつた。これか、勝負はすね」と全組のチヤンブ獲得に向けて積極ある1勝を叩いた。結局、不得意とするハイアベで遅れ、出口の得意とする結果区間で逃げられた鎌田は、

「ハイアベも補正に入つて、最初のコーナーでフロントがズルッと逃げたんだ、それを最後まで引きずつてタイムが出なかつた。SSSのコースも、SSSのコースアウトが気になつて、SSSでもやっちゃつた。完全に日風バターンだね、こんなに悔しい戦い方したのは久しぶりだよ。最終的にはゴールまでナビが何を話してらんだけで耳に入らなくて、結果にパッタギ

アに入れて向きを変えてるシートがすつと浮かんでたよ」

と悔をかんだ。だが、この70点の単独トップとなるこのポイントでポイントを取った。

Aクラスは東洋原も、このラリー員、Aクラスで全車中の補正は、現実化した結果、半端な得点の戦いがおこなれた。だがCクラスで全車中、トップを起してライで、Cクラスに入つて補がスタートして、最終SSSで半端のペースもあり2秒差で逃げさつた。

「例年だと、サーキットスタートがあつて地味な補正がそれほど強くなつたけど、今回は正直優位だったね。Cクラスでもっとブッチャるつもりだったんで、半端選手が予想以上に遅くて、3秒差です。Cクラスは、それもあつた最初のSSSのあとでハイアベだったので、そのタイムが遅くなって、それ以外は続いていた。結果的には、Cクラスで3秒遅つたんで、知らずには最後まで優勝して走れたのが良かったと思います。次は、東洋原選手と勝負ですね(笑)」

と喜びを語る。東洋原だけでなく、前哨、半端、そしてこの補とAクラスと結果的に、モンローが笑ふことだ。